

「ノモンハンの夏」 著者：半藤 一利（はんどう かずとし）

新聞に半藤一利さん（90歳）が1月14日に亡くなった記事があった。朝日新聞の評伝は『昭和史を伝え続けた語り部の根底には、14歳当時の空襲体験があった。1945（昭和20）年3月10日の東京大空襲。東京・向島周辺を襲った焼夷弾は「土砂降りの大雨なんてものじゃありません」。逃げまどう途中川でおぼれて命を落としかけた。

なぜこんなことが起きたのか。無謀な戦争に突き進み多くの犠牲を生んだ日本現代史の解明と記憶の承継を生涯の原動力とした。』とあり、筆者の追求した昭和史の一作が、今回案内する「ノモンハンの夏」である。

また、同日の天声人語の一節には、次のように書かれている。

『負け知らずだった日本陸軍が完膚無きまでに敗れた。それが1939年、ソ連軍と相まみえたノモンハン事件である。悲劇は作家半藤一利さんの手により「ノモンハンの夏」の中に凝縮されている。初めて読んだとき、心臓が震える気がした。

日本軍の火炎瓶などの手段ではどうにもならない最新鋭戦車。敵を研究せず、勇ましいことばかりを言っていた高級軍人たちを半藤さんは追求する。「ただただ敵を甘く見て、攻撃一辺倒の計画を推進し、戦火を拡大していったのは、いったいだれなのか」

無計画。自己過信。優柔不断。それらは反省されることなく太平洋戦争に引き継がれた。……半藤さんは、歴史を現代に常に結び付けて考える人でもあった。日本で権力が一点に集中していくのを憂い、対談で語っていた。「民主主義のすぐ隣にファシズムはある、そのことを国民はしっかり意識しなければならない」』と書かれている。

「ノモンハン」とは小さな集落の名で、原義はラマ僧の役職名。そしてノモンハン事件は、国境を流れるハルハ川を東西に関東軍とソ蒙軍が対峙する状況で事件が起こったのである。

本書では、国内の陸軍・内閣・天皇及び満州戦場さらに関係諸外国（主にドイツ・ソ連）等を対象に刻々と変わる政情・戦略・戦況などの場面・様子をまるで実況しているかのように描写しているため、臨場感が伝わってくるのである。

当時の陸軍の戦略を左右するのは参謀本部であり、今回の紛争の当事者の頂点にある陸軍の参謀本部第二課（作戦）は、エリート将校を中心とする閉鎖的な集団が形成され、外からの情報・問題提起が作戦課に直接つながることはまづなかった。

また、陸軍参謀本部の指示に従わない関東軍参謀は、敵状分析とその準備を怠り、その時勝負の自己中心的な作戦と戦場への指示に対する無責任さなど将兵の命の扱いの軽さに愕然としたのである。

また、その指示に従う戦場では、大差の戦力と無計画の戦略の下で必死に戦場を指揮する将校と将兵などの様子が伝わってくるのであるが、始めから勝算のない悲惨な戦いであった。

このような陸軍参謀本部・関東軍参謀の体質の中で事件は起こるべきして起こり、惨敗したのである。

また、その無計画な指示に従い、戦場で必死に戦い、亡くなった将校・将兵のことを思うと、この事件は一部の自己中心的で過信した関東軍参謀たちがいなかったら、また東京・参謀本部の強力な指導力を発揮していれば起こらなかった事件であり、仮に事件を起こしても、このような悲惨な負け方をしなかったのである。

一方、海軍の方針は、陸軍が推奨する日・独・伊三国同盟に反対の立場で、『「欧州戦争不介入」「英米不可分」「対米不戦」で今は国力を養って国家百年の計をはかるべし』とし、陸軍と激しく対立していたのである。

また、昭和天皇は、三国同盟に反対するとともに侵略戦争を諫めているが、陸軍参謀まで本意が伝わらないか又は、自分たちに都合のよい解釈をすることにより、事が進められていたのである。

この時点では、天皇や海軍部によりかろうじて世界戦争への参加を踏みとどまっていたのである。

世界情勢をみると、ドイツ（ヒトラー）は、英仏と対立している状況から、ソ連とは不可侵条約を結び両方から攻められる状況を回避する道を選んだのである。一方、ソ連（スターリン）は日本との全面戦争を避け、早くノモンハン事件を決定的に解決し、欧州に目を向けておく必要があったため、ヒトラーと駆け引きをしながら優位な立場で独ソ不可侵条約を結んだのである。驚くことに、日本は、この動きを全く把握していなかったのである。

あとがきで、筆者は『それにしても日本陸軍の事件への対応は、愚劣かつ無責任というほかない。歴史を記述する者の心得として、原稿用紙を一字一句埋めながら、東京と新京の秀才作戦参謀を罵倒し嘲笑し、そこに生まれる離隔感でおのれをよしとすることのないように気を付けたつもりである。しかし時に怒りが鉛筆の先にこもるのを如何ともしがたかった。それほどにこの戦闘が作戦指導上で無謀、独善そして泥縄式でありすぎたのである。勇戦力闘して死んだ人々がうかばれないと思えてならなかった。』と述べており、史実を調査していくうちにその真実に触れ、よほど我慢できなかつたのであらうと思われた。

軍部の上層部のエリートたちに欠けているのは、人間の命の重みに対する認識である。そんな集団が自己中心的な戦略・指揮をしていたのである。そして、日本は、徐々にそれを止める力も指導力も失われていったのだろうか。

事件終結後、「ノモンハン事件研究会」が設置され、失敗を今後どう生かすか議論したはずであるが、それからほとんど学ぶことなく、太平洋戦争で同じ過ちを繰り返すことになるのである。しかし、なぜあれほどまで三国同盟に反対していた海軍や天皇が「日独伊三国同盟」を認め、太平洋戦争に向かったのか疑問が残るのである。